

橫溝正史探偵小説選Ⅴ
目次

探偵小僧……………1

仮面の怪賊……………218

王冠のゆくえ……………230

十二時前後……………239

*

博愛の天使^{エンゼル} ナイチンゲール……………243

不死蝶（雑誌連載版）……………257

〈未完作品集〉

女ぢよ怪かい

.....

322

猫眼石の秘密

.....

385

神の矢

.....

392

失はれた影

.....

427

【解題】横井 司

.....

466

凡例

- 一、「仮名づかい」は、「現代仮名遣い」(昭和六一年七月一日内閣告示第一号)にあらためた。
- 一、漢字の表記については、原則として「常用漢字表」に従って底本の表記をあらため、表外漢字は、底本の表記を尊重した。ただし人名漢字については適宜慣例に従った。
- 一、難読漢字については、現代仮名遣いでルビを付した。
- 一、極端な当て字と思われるもの及び指示語、副詞、接続詞等は適宜仮名に改めた。
- 一、あきらかな誤植は訂正した。
- 一、今日の人権意識に照らして不当・不適切と思われる語句や表現がみられる箇所もあるが、時代的背景と作品の価値に鑑み、修正・削除はおこなわなかった。
- 一、作品標題は、底本の仮名づかいを尊重した。漢字については、常用漢字表にある漢字は同表に従って字体をあらためたが、それ以外の漢字は底本の字体のままとした。

神の矢

第一章 運命の馬車

中央線のCという一小駅でおりて東へ二里、山また山とつらなるなかを歩いていけば、そこに豁然として美しい高原地帯のひろがるのを見るであろう。

T山のゆるやかな傾斜がつくるT高原である。

この高原、南は岷々たるYヶ岳の連峰につらなり、東から北へかけてはT山を越えてKヶ峰に接し、ちょうど袋の底のような位置にある。ただ一つの出入であるところの、中央線のC駅へ出るにしても二里あまり、それも羊腸たる山間の細径をたどらねばならないのだから、ちよつと浮世のかくれ里というかんじである。

事実、この高原には温泉が出るのだが、昔からこれを信玄公のかくし湯とよんでいた。

伝説によると、越後勢との合戦にきずついた甲斐の兵馬が、この地を下してひそかに傷養生をするところとしていたことだが、いかさまあたりの地形を見れば、兵馬倥傯の間、武士のかくれ養生には、もって来いの場所であつたらうと思われる。

元亀天正のあの動乱時代でも、さすがにここまでは剣戟の音もとどかなかつたであろう。戦いに寧日なかつた甲斐がたの侍も、ここで疵養生をしているときばかりは、のんびりと刀を研ぎ、鏃を磨くことが出来たであろう。その遺跡か、それともこのような片山影のかくれ里でも、おりには合戦があつたのか、この高原ではいまでもときおり、刀の折れたの矢の根だのが掘り出されるといふことである。

さて、その後天下の形勢が定まるにつれて、そういう血腥い浴客は影をひそめ、ここはいたつて閑散な温泉場となつた。昔からここには三軒の温泉宿があるのだが、なにしろ場所が場所だから、たまさか近在のお百姓が、農閑期の骨休めにくるくらいのもので、ついちかごろまでは、いたつて鄙びた湯治場になつていた。

ところが最近になつて、にわかはこの高原が天下に知られるようになったのは、さる有名な呼吸器病の博士が、軽井沢以上の保健地と折紙をつけたからである。

博士の研究によると、紫外線の豊富なことにおいて、この高原ははるかに軽井沢をしのいでいるのみならず、高原につきものの霧が、ここでは珍しく少ないのである。つまり、それだけ湿度がひくいわけで、湿度がひくいからものが腐敗しない。別荘など冬中閉じたままほったらかしておいても、夜具にカビひとつ来る心配がないというのだから、避暑地として、これくらい理想的な場所はない。だから京浜地方の金持ちで、この地に別荘を建てるものがしだいに多くなり、夏季には駅からバスを通じ、白樺づくりの郵便局がとくべつに設けられたりした。

三軒の温泉宿も、近代的な設備をほどこした新装の別館をたて、せいぜい都会からの避暑客を誘致するようにつとめた。

こうしてかつての鄙びた湯治場は、にわか近代的な避暑地となり、毎年夏になると、色鮮かな都会のモードが、ぱっとこの高原の地に花ひらくのが例になっていた。地元のひとたちも、いくいくは軽井沢以上の避暑地にしてみせると意気こんでいたが、それがぱったりいけなくなったのは事変のせいである。

なんとといってもここは軽井沢にくらべると地の利が悪い。不便過ぎるのである。バスがとまると、その日の生

活物資にもことかく始末である。事実また、事変が深刻さを加えていくころから、命の綱のそのバスも廃止されてしまった。

だから軽井沢が戦争とともに、かえって繁栄して、軽井沢相場などという大闇値を現出したのに反して、ここはひところさびれる一方であった。数多い別荘もとざされたまま、夏になつてもひらかれることはまれになった。ところが事変が戦争となり、戦局がしだいにひっばくしていくころから、また、様相が一変してきた。長らくとざされていた別荘が、つぎからつぎへとひらかれていったかと思うと、京浜地方から続々と人が入りこんで来た。いうまでもなく疎開のためである。

空襲のサイレンにおびやかされ、防空壕を出たり入ったり、家を焼かれたり、火に追われたりする恐怖から考えると、土地の不便さや物資の不自由さ、さてはまた越冬のきびしさも、なんのものはであったのであろう。

こうしてこの山奥へ逃げこんで来た人々を見ると、いずれも京浜地方の金持ちばかりだったから、あのドサクサのなかを、どうしてこうも運び出せたかと思われるほど、みんなそれぞれ、おびただしい物資を持ちこんで来ていた。

ある人は目の飛出るほどたかい闇値のトラックに、鐘

詰の類をいっぱい積んで来た。ある人は舶来のウイスキーや葡萄酒を、何十箱となく持ちこんで来た。またある奥さんは、箆笥三棹にぎっちり着物をつけて来て、ひさしぶりにモンペから解放されたわと、いちにちに五度も六度も着更えては、しゃなりしゃなりと歩きまわったりした。

こうしてやつと生命の恐怖から解放されたものの、では、このひとたちが何かの希望をもっていたかというところではない。戦争末期のあの救いのない暗澹さ、きょうはきょうで暮れていったが、明日はどうなるかわからないという絶望感。——そういう棄鉢な気分をだれよりも強く抱いていたのがこの人たちであった。当然、かれらは利那主義者であり、快樂主義者であった。

しかもそこは都会を遠くはなれたかくれ里の別天地であったから、かれらの生活ぶりに圧迫を加えるような條件も少なかった。怖い軍部や憲兵の眼もここまでとはどかなかった。かれらはいいい気になって、日増しに大胆になり、無軌道になり、世紀末的になっていった。そして誰の眼にも戦争がいよいよいけないとわかるにつれて、頽廢のいろはますます濃くなりまざっていったが、そのやさきに、戦争は敗戦というきびしい現実とともに終わった。

戦争がすむと間もなく、疎開者の半分くらいは都会へ

ひきあげていった。そしてあとに残ったのは、ひきあげようにも住むべき家をうしなつた人々ばかりで、その人たちはいよいよ棄鉢な気分になり、まるで悪性の腫物が膿みくずれたように、デカダンスの花がばつと毒々しくひらいたのであった。

これからお話しようという、このえたいの知れぬ一聯の殺人事件は、こういう小天地の雰囲気のおかげ、こういうデカダンスの泥沼を背景として起つたもので、いまから思えば、そういう時代と場所とを理解することなしには、とうてい諒解出来ないように、一種不可思議な、妙な薄気味悪い事件であった。

それは昭和二十年九月なかば、即ち終戦の日から数えて、約ひと月ほど後のある夕方のことである。

満員船詰め——と、いうよりは、乗客が鈴成りになつた中央線下り列車から、バラバラとC駅へとびおりた十数名の男女のなかに、三十五六の、眉の太い、眼の大きい、小鼻の肉のあつい、どっしりとした顔立ちの人物があつた。頭を丸刈りにしているのは、兵隊がえりかも知れない。上衣を小脇にかかえ、開襟シャツ一枚になつていたが、その開襟シャツもぐつしよりと搾るように汗になつていた。

「おお、ひどい。呼吸がとまりそうだった」